

「ヨーロッパ」、反キリストの到来のための備えが整いつつある

<https://www.youtube.com/watch?v=BqmVkbzP-9k&t=22s>

2016年10月15日 ミネソタ州

Olive Tree Ministries 主催 預言カンファレンスにて

主催 Olive Tree Ministries : <http://olivetreeviews.org/>

メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>

日本語訳 by ガスタフソン あつみ

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

第二テサロニケ人への手紙4:16-17

ここに立てることを大変光栄に思います。

初めに言うておきますが、私はまもなく携挙が起こることを大いに信じています。というのも、11月中旬にクリスマスの電飾を目にすれば、感謝祭が間もなくであることが分かりますが、今日これからお話しする内容は、その電飾であり、それは私たちが経験しなくてよいはずのものが 来ようとしていることを、今現在示唆しているものだからです。

メッセージのタイトルは「ヨーロッパ」、反キリストの到来のための備えが整いつつあるです。ありがたいことに、反キリストが誰なのか私には分かりませんし、また私は知りたいとも思っていないので、メッセージの中心は反キリストについてはありません。そうではなくて、ヨーロッパに焦点を当てたいと思います。

そこで、今お話しておきたいことがあります。それは私の短い人生の中で、ほんの数回ですが、何かを見るか、あるいは何かの存在に触れるかして、私自身 気絶しそうになったことがあります。私は通常は冷静を保って タフなふりをして、何も問題はないといった風を装っていますが、初めて、私があるグループを神殿の丘に連れて行ったときのことをお話しします。今はもう、あの場所は完全にサタンにやられていると信じているので、誰もそこには連れて行かないことにしています。しかし、初めて岩のドームに近づいたときのこと、当然ながら、私はあの大理石の平岩の真ん前に立ちました。すると、この獣の顔が私をまっすぐに見ているのが目に入ったのです。ご覧のとおり、これはあの建物の角にある、大理石の平岩ですが、そこに行くと、これを見ることとなります。ところで、これは自然に形成されたもので、誰かが絵を描いたわけでも創作したわけでもありません。この石があそこにはめ込まれた時に、もともとこの図

がその石の中にあったものなのです。そして私はそれを見たときに、もう少しで気絶しそうになったのを覚えています。その時、あの場所で、ものすごい悪霊の存在を感じました。エゼキエル書の8章から10章に書かれていることから、神の霊はずっと昔に、あの場所から離れてしまっていると私は信じています。神の霊があの場所から離れてしまったのは、人々がタムーズを初め、数々の他の神々を拝んで、真の生ける神への礼拝を完全に捨て去ってしまったためでした。神殿はそこに建っていたのですが、その中で神を礼拝する者が誰もいなかったわけです。そしてこれは、現在の多くの教会の絵と重なるところがあるのではないのでしょうか。建物は美しく、設備も素晴らしいものがありますが、そこで礼拝の対象となっているのは、本当に主イエスでしょうか。

その次にこれを経験したのは、二階の間 (the Upper Room)を訪れたときでした。二階の間からグループの人たちと一緒に、下に向かって階段を降りて行きながら、私はまた、もう少しで気絶しそうになったのですが、私にはどうしてなのか分かりませんでした。ところが、その約2週間後に、エルサレムの行政機関が、その近くにあった二階の間の一つに続く階段の手すりの周りの植物を少し刈り込むと、そこにフリーメイソンのシンボルがあったのです。どうやら、私はイスラエルにおけるフリーメイソンのロッジの中でも、三本の指に入る重要なものの一つ、ロッジ2号シオン山の前に立っていたのでした。それがそこにあったとは、2週間後まで知りませんでした。

その後、3度目に経験したのは、先月でした。私がヨーロッパに行ったときです。宿泊先はアムステルダムのだム広場にありました。タクシーを降りて、部屋に荷物を置き、すぐに外に散策に出かけたのですが、2～3分のうちに私は走って部屋に引き返しました。私は書き物をして、いくつかのミーティングに出席するためにそこに行っていたのですが、部屋を出るたびに、必ず10分以内に走って部屋に戻ってしまいました。呼吸もできないほどでした。私はそのヨーロッパのホテルの部屋からジャンさん（カンファレンス司会者）と打ち合わせをしました。その瞬間に、はっきりと分かったのです。私は、この世の君主の王国のど真ん中にいる、そして、私は反キリストの台頭に、すでに備えができている場所の中心にいるのだと。

これだけは言うておきますが、私は人の気をひくためにセンセーショナルなことを言ったりしないようにしています。実際、そういうのは大嫌いです。ただ、反キリストがイスラム信者であろうという考えは、私には絶対に受け入れられません。その理由は単純に三つあります。一つ目。イスラム信者のことをメシヤだと主張するようなユダヤ人は、私も含めて一人もいません。二つ目。ユダヤ人と平和な関係を持つようなイスラム信者を、私は一人も知りません。そして三つ目。神殿の丘にユダヤ人が神殿を建てるのを、許すようなイスラム教指導者を、私は一人も知りません。このことだけをとってみても、私にしてみれば、それは考えるだけでもバカバカしいと思います。

しかしながら、歴史を振り返って、世界の指導者たちがイスラエルに平和をもたらそうと、西洋諸国からやって来るとき、近年だけを見ても、ビル・クリントンがオスロ合意に署名するためにイスラエルに到着した時、イスラエル人たちは大いに歓迎し、オバマが到着した際には、皆があちらこちらに赤いカーペットを敷いて歓迎しました。彼のことはそんなに好きではないのに、彼が来ると皆、非常に喜びんだのです。皆さんに理解してほしいのは、私たちはイスラム指導者に対しては、全くエキサイトしませんが、西洋の世界的リーダーに対しては、非常にエキサイトするのです。イスラエルは、イスラム世界のようになることを願っているのではなく、西側世界のようになりたいと願っているのです。

そして、いかにヨーロッパがそうなりつつあるかということには非常に興味深いものがあります。私はアン・グラハムさんの「ダニエルの祈り」という本を読ませてもらっていますが、この本によって、私の祈りの習慣が全く変えられました。アンさん、ありがとう。そして当然ながら、おかげで私はダニエル書を何度も何度も読むことになりました。ダニエルというのは、聖書の中のすばらしい人物だからです。私たちは彼の夢に出て来た、あの像について解釈があることも知っています。純金の頭、銀の胸、青銅のもも、鉄のすね、一部が鉄で一部が粘土の足。そのイメージは、今こちらの画面でご覧になれます。私たちには金の頭が当時の支配国であったバビロン帝国であり、次にメド・ペルシャ連合帝国が銀の胸と腕、ギリシャ帝国が青銅の腹ともも、鉄のすねは紀元前168年から紀元後476年にわたって支配したローマ帝国であることが分かっています。そしてあの巨大な像の足については、昔から謎となってきました。その足は一部が鉄で一部が粘土からできていたのですが、鉄と粘土というのは本来は混じり合うことができません。それは初めから統一することのできない運命にあったのです。私はヨーロッパ、それも西ヨーロッパが、ダニエルの見たところの、あの岩が砕いたもの、つまり足であると信じているのですが、それを皆さんにご説明したいと思います。

始めの4帝国については、聖書に書かれている、歴史の範囲内で成就されました。ローマ帝国に至るまですべてのことは、旧約聖書、あるいは新約聖書内に記述されています。しかし5つ目、ローマ帝国と続いて興る新しい帝国は5世紀に最終的に崩壊するまで続くこととなります。そして次は当然、足です。まだ成就されていないのは足だけです。鉄と粘土は混じり合うことができません。ということは、私たちは非常に弱く、最終的には岩によって破壊され、砕かれることになる分裂した勢力を目にすることになるのです。では、この岩とは誰を指しているのでしょうか。

詩篇118章、マタイ21章、イザヤ8章、イザヤ28章、第一ペテロ2章6節、2章8節、第一コリント10章4節。

家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。(詩篇118章22節)

家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、

上思議なことである。(マタイの福音書21章42節)

そうすれば、この方が聖所となられる。しかし、イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、エルサレムの住民にはわなとなり、落とし穴となる。(イザヤ書8章14節)

見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。(イザヤ書28章16節)

見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望されることがない。(ペテロの手紙第一2章6節)

「つまずきの石、妨げの岩」なのです。(ペテロの手紙第一2章8節)

みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。(コリント人への手紙第一10章4節)

もっともっと続けて聖句を挙げていく時間があつたらいいと思うのですが、その鉄と粘土から成る王国を打ち砕くことになるあの岩のことを、この見地から見るしかないことはお分かりでしょう。マーク・ヒッチコック博士が今朝言われたように、国々、王たち、支配者たちは、神とその御子イエスとの絆を切りたがるものです。しかし、私たちは次のことを覚えていなければなりません。

なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者にと逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」(詩篇 2章1〜3節)

足を砕く岩とは、間違いなく、再臨におけるキリストのことなのです。

ですから、私たちには胸を躍らせてよいことが二つあります。携拳されてキリストのもとに行くということだけではなく、キリストが来られるとき、私たちもまたキリストと共に戻って来て、その時に反キリストによって支配されている悪の帝国を終わらせるのだという事実です。

さて、私たちはネブカドネザルが、バビロン帝国の王であったことを知っています。彼がバビロンを築き上げたという人たちもいますが、バビロンはヘブライ語ではバベルです。バベルは、創世記11章1〜9節にまでもさかのぼります。人々がシヌアルの地に移って、塔を建てたのは皆さんもご存じのとおりです。それがバベルの塔でした。バベルという名は、ヘブライ語で「神が混乱させる」という意味を持っています。バベルの塔はこのような外観をしていました。ご覧のとおり、それは未完成のまま、神によって砕かれ、

崩壊されました。

バビロン帝国は、メド・ペルシャによって、バビロンにおいて崩壊しました。私はバビロンがいかに移動して行ったかをこれから説明したいと思います。まず最初に、バビロンはバビロンにおいて打ち破られました。そしてバビロンを支配したペルシャ帝国は、バビロンでアレクサンドロス大王によって破られました。アレクサンドロス大王によるギリシャ帝国は、そのバビロン地域でローマ帝国によって破られました。ただローマ帝国だけは、バビロンで破られなかったのです。そこで止まっているのです。彼らはドイツ系民族によって、バビロンではなくヨーロッパにおいて破られたんです。ですから、バビロンは、歴史を通して王国が興ったり滅んだりしていく中で、ずっとバビロンに存在し続けたのです。しかし、いったんローマ帝国に来て、ヨーロッパに来てからは、止まったままなのです。そこで止まったのです。

これはダニエル書7章に書かれている10本の角のことを考えると、とても興味深いことです。この10本の角から反キリストが出て来るわけですが、私にはこれが西ヨーロッパであるとしか考えられません。私たちは今、十あった部族のうち、もはやその三つが存在していないもののお話をしています。

- ・西ゴート族 (Visigoths) – スペイン
- ・アングロサクソン民族 (Anglo-Saxons) – イギリス
- ・フランク族 (Franks) – フランス
- ・アレマン族 (Alemanni) – ドイツ
- ・ブルグント族 (Burgundians) – スイス
- ・ランゴバルド人 (Lombard) – イタリア
- ・スエビ族 (Suevi) – ポルトガル
- ・ヘルール族 (Heruli)
- ・東ゴート族 (Ostrogoths)
- ・バンダル族 (Vandals)

画面でご覧になれるように、これらのうちの7つは今も存在していますが、最後の3つはもう存在しません。世界のある地域が、その特殊な状況にこんなにも当てはまるとは、驚きを覚えます。

そして私は、EUの旗に与えられた星の冠を見ていると、それは天の女王に与えられたあの冠ではないのかと思うのです。天の女王というのは、バビロン人たちがニムロデの産みの母親のことをそう呼んだ、あの天の女王とおなじではないか。彼らの神話ではバビロンを築いたとして知られている、ニムロデの母親のことではないか。私たちには創世記10章8節からノアのひ孫として知られているあのニムロデは、彼らの神話によれば、バビロンを構築した優れた人物なのであり、その母親は天の女王だということです。いいですか。創世記に出てくるバベルの塔は、神に対する反逆の象徴であり、神が存在しないことを証明しよ

うとするか、あるいは神に取って代わろうとする試みであったのです。それは、今日私たちが目にする光景と違いはないと思いませんか。ほとんどの人たちが、神がないことを証明しようとしていたり、または、神に取って代わろうとしています。これは初っ端から、サタンの第一の目的だったのですから驚きです。サタンは、エデンの園で彼らにこう言いました。「神があなたたちにこの実を食べさせたくないのは、あなたたちが神のようになるといけないからです。この実を食べれば、あなたも神のようになれるのです。」イザヤ書14節に、サタンについて書かれていることを読むと、興味深いものがあります。彼がいかにして天から落ちたか。しかし彼は上りたかったのです。はるか上まで。いと高き方のように。

バビロンという都市はある象徴となりました。神はその塔を破壊し、その町は罪と神に対する背きの象徴となったのです。バビロン捕囚は考えられないことでした。が、イスラエルの民、つまり約束の民、約束の地へと暗やみから光に連れ出されていた民が、彼らの不従順のために、彼らが神に背いたために、背きの象徴である町へと逆戻りして行くことになったのです。神に従わないなら、あなたは基本的に、反逆の領域へと歩んでいることになるのです。反逆の地へと。だから、私はウィーンで美術史美術館に行ったとき、非常に驚いたのです。そこには、あの有名な『バベルの塔』の絵があります。1563年にオランダの有名な画家、ピーテル・ブリューゲルによって描かれたものです。EU（欧州議会）の議事堂が建設される際、皆さんもご存じのように、フランスのストラズブールにある議事堂はその絵に描かれている建物そっくりそのままに設計されたのです。「ああ、アミールさん、あなたの想像力はすばらしい(笑)。」EU 議事堂に行って、建物のツアーに参加してみたら、教えてもらえます。彼らは、このことを隠そうともしていません。ヨーロッパがそのことを隠していると思うのですか。私たちは今、120億ドルをかけて西暦2000年に完成された、神に反逆することへの人間の誇りを象徴している、総合施設の話をしているのです。あなたがそれでもまだ、この建物はバベルの塔とは関係がないと言うなら、欧州議会が作成したこのポスターを見てください。「ヨーロッパ。多くの言語。一つの声。」そして、バベルの塔も描かれています。そして、オカルトや他宗教のシンボルの詰まった星の図があり、「みんな同じ星を分け合うことができる」と書かれています。「飛び入り自由。」これが今日のヨーロッパです。そしてブリュッセルにある欧州議会本部の外には、これまたビックリするような像が立っています。女が獣に乗っているのです。そしてそれは彼らによると、ヨーロッパがヨーロッパと呼ばれる由縁なのです。ヨーロッパがヨーロッパと呼ばれるのは、エウロペに由来しています。エウロペのレイプというのは、ギリシャ神話の中でも非常に有名な話です。このギリシャ神話によると、花を摘んでいたエウロペ姫を惹きつけるために、ゼウスは白い牡牛に変身しました。エウロペが牡牛に近づいてその背に乗ると、牡牛はその機会をつかんで彼女を連れて逃げ去り、しまいにレイプしてしまいます。エウロペは死後、「天の女王」として神の名誉を受けました。同じ女神が、バビロンからギリシャまで続いて、ギリシャ神話にまでなったのです。ヨハネの黙示録17章3～5節を読むと、ひとりの女が獣に乗っており、その額には意味の秘められた名「大バビロン」と書かれているとあります。いいですか。EU 本部の外にあの彫像を置いた人たちは、ヨハネの黙示録17章は読みません。彼ら

はギリシャ神話に目を向けます。ヨハネが終わりの時に起こることについての啓示を受けたとき、彼の頭の中では、あの獣に乗った女の姿が見えていたのです。そしてヨハネはその女のことを、こう呼んでいます。「バビロン。謎の大バビロン。」バビロンが西欧に向かってどう移動し始めたかを見ると興味深いものがあります。実のところ、バビロンは西欧から招待を受けたのでした。事実、バビロンは西欧が誇りとするところでした。もしも、話がただ、あの奇妙な醜い彫像だけのことだったなら、私もそんなに問題扱いしなかったでしょう。ところが、獣に乗った女は、1945年にドイツの5マルク札に見られました。1979年にはドイツのベルリンの壁に描かれ、1984年には第2回欧州議会議員選挙を記念した英国の切手に現れ、1992年にはドイツのEQ硬貨（ユーロの前身）や、ブリュッセルの空港ラウンジの絵、ドイツのテレホンカード、ギリシャの新しい2ユーロ硬貨の裏にも見られました。いたるところにあるのです。彼らはもう隠そうともしていません。ヨハネの黙示録17章の謎のバビロンは、物や場所、果ては通貨にいたるまで、ヨーロッパ中を飾っているのです。

ところで、ホロコーストや第二次世界大戦の話をする、アドルフ・ヒトラーには、バビロンを再建するという夢がありました。彼はヨーロッパがバビロンになるという夢を持っていたのです。これはとても興味深いことです。皆さんの中に「ツェッペリン」というのを聞いたことのある方々がいらっしゃいますか。ツェッペリンというのは、大きな硬式飛行船のことです。わかりますよね。ツェッペリンというのは、ドイツ人のフェルディナント・フォン・ツェッペリン伯爵の名前にちなんで名づけられた、硬式飛行船の一種です。彼は20世紀初頭に、飛行船開発の先駆けをなしたドイツ人でした。ニュージャージー州で起こり、30人以上の死者を出したヒンデンプルク号の惨事のごときは有名ですが、皆さんに知ってほしいのは、ニュンヘンブルクには、ツェッペリンが離着陸することになっていた特別区域があって、そこはツェッペリンフェルトと呼ばれていました。アドルフ・ヒトラーはアルバート・シュペーアという人物を雇って、ツェッペリンフェルトを設計させたのですが、そのモデルにしたのが、ゼウスの祭壇でした。そのゼウスの祭壇は、トルコのペルガモンという町で見つかったものです。皆さんは「ちょっと待って。ヒトラー？ペルガモン？トルコ？ツェッペリン？」と不思議に思っているでしょう。さあ、これらをつなげてみましょう。ベルリンにあるペルガモン博物館は、ムゼウムスインゼルと呼ばれる博物館島の中でも、とりわけ美しい博物館の一つですが、そこには信じられないような芸術品が2点収められています。皆さんは、「ああ、彼らはニューヨーク市にバアル神殿の門を複製しようとしている」と大騒ぎしていますが、それは複製にすぎません。私は今、あの博物館の中にある、本物について話しているのです。皆さんに理解してもらわなくてはいけないのは、ペルガモンという町は、今はその劇場しか見えませんが、巨大な都市でした。ペルガモンの人びとは、発明家や革新者で、たぶん当時はアテネに対する最大の競争相手として知られていたと思われます。アクロポリスはアテネのライバルであったと言われています。そこにあった図書館は古代世界においては世界で二番目に大きなものでした。その図書館は、アントニー将軍がクレ

オパトラに贈った図書館なんです。ペルガモンの人々は、アジアの神殿守護人として知られていました。ペルガモンには神殿が三つありました。ローマ皇帝を礼拝するためのもの、女神アテナのためのもの、それからゼウスの大祭壇。それは当時のペルガモンの人たちにも他ならぬサタンの王座として知られていたのです。そこにはある有名なキリスト教徒が住んでいました。ヨハネの黙示録2章13節には、アンティパスのことが語られています。彼はその場所にあったキリスト教徒グループの指導者のうちの一人でした。彼はキリスト信仰を捨てようとしなかったため、彼らは牡牛の内臓をすべて取り出して、その牡牛の中に彼を詰め込み、それをあぶり焼きにしました。牡牛の目からは蒸気が出てくるのです。そうやって彼に信仰を捨てさせようとしたのです。これはサタンの王座として知られるサタンの祭壇の前で行われた悪魔的な行為でした。だからヨハネの黙示録2章にはこう書かれているのです。

「わたしの忠実な証人アンテパスが、サタンの住むあなたがたのところで殺された」と。おもしろいことに、サタンの王座として知られるゼウス祭壇は1930年以来、ベルリンにあるのです。あの博物館の内部に。そして今あなたが目にしているこれは、ナチス軍やナチス党の行進や式典のためにアドルフ・ヒトラーがツェッペリンフェルトをこのように設計してほしいとアルバート・シュペーアに依頼したものなんです。ヒトラーには自分のしていることが分かっていました。彼はバビロンを再建したかったのです。サタンの王座をそこに据えたかったのです。そして、それでもまだ足りないかのように、(ヨーロッパがバビロンを招き入れているなんて、皆さんは私が突拍子もない想像力を使っていると思われるかもしれませんが、)あの博物館にもう一つ収められているのは、バビロニア帝国のイシュタル門です。実際に、これはバビロニアからそのまま移された門の一つで、1930年代に考古学者たちによってドイツに持ち込まれたものです。ですから、あの博物館にはサタンの王座とバビロンの門が収まっているのです。

「いつ？」これが1920年代、1930年代または40年代に始まったこと、と考える必要はありません。いいえ、それはそれよりもずっと以前に始まっていました。ヨーロッパでは、ものすごくおぞましいことが、ずっと以前に起こっていました。皆さんは Templar 騎士団というのを耳にしたことがありますか。1118年に創設された修道会で、エルサレムに来る巡礼者たちを守るのが目的だったのですが、彼らには、今日の岩のドームがあるまさにその場所に、ボードゥアン王2世の建てた聖堂、もしくは宮殿の一角に領地が与えられていました。神殿の丘にある、岩のドームは、イスラム教徒たちによって建てられた記念堂として始まり、その後、十字軍の聖堂に転向され、そしてまたイスラム教のモスクへと変えられました。そして十字軍のものであった期間中は、Templar 騎士団にその一角が与えられていました。そこから Templar 騎士団という名前が由来しているのです。そこが Templar (聖堂) が建っている場所だったからです。そしてこの人たちが邪悪な者たちであったことは、皆さんにも知っておいてもらわなくてははいけません。彼らがどれほど悪に長けていたかをお話ししましょう。十字軍に参加したい人たちは、誰でもヨーロッパからエルサレムの地まで、少なくとも数か月をかけて、歩いてこななければならないことを彼らは知ってしまし

た。そして、中にはもう故郷に戻れない可能性のある人たちがいることも認識していました。人々の所有物や、お金を守るために、彼らは史上初めて小切手帳というものを作ったのです。それが Templar 騎士団によって始められたというをご存知でしたか？あなたが持っている小切手帳は、あの時に始まったものなのです。聖地に来たいと願う人たちは、誰でも、ヨーロッパにあった彼らの事務所に行って、自分たちの持ち物すべてを渡し、それと交換に文書を受け取り、その文書を懐にしおいて聖地まで旅をして、聖地に到着すると、その文書と交換にお金を受け取るという仕組みでした。さて、90%の人たちは、聖地にたどり着くことがありませんでした。90%の人たちは途中で亡くなってしまったのです。その90%の人たちの所有物は、Templar 騎士団の手に入ったわけです。彼らは見事な成功をおさめ、1128年には教皇の特別な保護のもとに入り、誰も手を出すことのできない存在となりました。皆さん、彼らは当時でこの地上における最も裕福な団体組織となったんです。彼らは200年しか続きませんでした、非常に邪悪だったのです。ところで、銀行制度にはその時から悪が存在し始めたんですね。その理由はもうすぐお分かりになります。これらの人々はそこから始めて、さらに発展し、その入会の儀式において、人々にイエスの十字架に唾をかけさせるようになりました。彼らは、私が口にしたくもないような、ひどいことをもっともってやっているのです。自分たち自身では、正しい慣習を行っていると思っていたソドムの人たちのように。彼らは他の神を認めざるを得ませんでした。その神はヤギの顔をしていました。画面でその姿をご覧になれるのですが、彼らはそれをバフォメットと呼びました。これが、自らを Templar 騎士団と呼び、キリスト教徒を擁護する者と自称した人たちが礼拝し、その会員となる者すべてに礼拝することを強要した新しい神でした。興味深いことに、ヤギの姿をした神、あるいは神々というのは、レビ記17章7節において神がすでにそれについてイスラエルの民に語っていたことが分かります。神は、彼らがそれを礼拝するのを嫌われました。皆さんに理解してもらいたいのは、神がそれに対して、もうすでに警告していたということです。これは容認されることのないものなんです。神がそれを忍耐されることはありません。彼らはヤギである神を礼拝しただけでなく、売春や性的不品行もそれに付随させていました。そのバフォメットは、ヨーロッパに悪が継続していくのと同時に存続していきました。悪は Templar 騎士団の時代から続いていきました。Templar 騎士団の悪は、フランスの王によって暴かれ、彼らは処刑されましたが、その後もその悪は存在し続け、18世紀のヨーロッパまで続きました。ヨーロッパの啓蒙時代まで。ヨーロッパでその時に始めて、大変危険なオカルトに発展し、非常に危険な秘密結社となったもの。今お話ししているのは、落胆したユダヤ人と非常に不満を持ったイエズス会士の組み合わせのことです。皆さんもご存知のことですが、ロスチャイルド家は、元々はロスチャイルドという名前ではありませんでした。1743年にアムシェル・モーゼ・パウアーという金細工職人が、ドイツのフランクフルトに古銭を扱う店を開きました。彼は店のドアの上方に、赤い盾にローマの鷲が描かれた表札を掲げていました。彼には息子がおり、その名前をマイアー・アムシェル・パウアーと言いました。彼は幼少から信じがたいほどの優れた知的能力を示し、非常に成功して、最終的に、父親の店を買収するためにフランクフルトに戻りました。彼は1743年に戻ったわけですが、まだそのドアの上にかかっていたあの大きな赤い盾を見て、その赤い盾

の重要性を認識し、自分の名前を「赤い盾」、ドイツ語では「ロスチャイルド」、に変更したのです。そして彼はこう考えたのです。「世界征服に一番良い方法は、お金を貸すこと、それも、ただ人に貸すのではなく、政府に貸すことだ。そうすれば、私は何でもしたいことができるようにできる。」彼は、落胆の大きかった別のあるユダヤ人と共謀し始めました。その人物とは1748年にインゴルシュタットで生まれたアダム・ヴァイスハウプトです。彼はイエズス会に承認された人物であり、また、サタン崇拝者ともなった人でした。ヴォルテールのような哲学者を奉じていた人物だったのです。今話しているこの二人の組み合わせは、サタン崇拝者と世界征服願望を持つ人物から成るもので、この二人は18世紀のヨーロッパに征服のチャンスを見たのでした。それは非常に暗くて、また非常に邪悪だったので、彼らは自分たちに慈善団体の仮面をかぶせなければなりませんでしたが、その内側では彼らの仕事は全く異なるものでした。それは、ヨーロッパで始まったばかりの福音派の教会をつぶすこと、そして世界を征服することだったので。彼らは神が、礼拝されるのにふさわしいとは信じていませんでした。礼拝されなくてはならないのは、神ではなくサタンだと信じていたのです。そのようにして、イルミナティが1768年5月1日にドイツのインゴルシュタットで生まれたわけです。彼らは、それよりおよそ100年前に、ドイツに存在していた秘密結社の名前を受け継ぎました。イルミナティというのは「光に照らされたもの」「悟りを開いたもの」という意味です。では何の光でしょう。それはルシファアの光です。彼らはイルミナティとして露呈されると、何か全く新しいものに潜入する必要があると認識し、1717年にフリーメイソンがロンドンで始まって、ずっと続いてきました。フリーメイソンの人たちは、石工（メイソン）でした。彼らは建築に携わっていました。だから彼らはメイソンと呼ばれたのです。しかし、問題が一つありました。ヨーロッパでは1700年代の当時、もはや大きな聖堂は建設されていませんでした。大きな教会や建物は建てられなかったので、彼らには仕事がありませんでした。そこで実務的フリーメイソンは、思索的フリーメイソンとなって、間違った悪いものに手を出し始めました。ヴァイスハウプト氏はロスチャイルド氏とともに、その当時、ヨーロッパ中で最も成功していた秘密結社のフリーメイソンに潜り込んだのです。そして彼らは、彼らの計画を推し進めていくのはこの道だと実感したのでした。ここで、メイソンが、彼らの書物に書いたことを二つ読み上げたいと思います。一つ目はアルバート・パイクの『モラルとドグマ』の321頁から。「ルシファア、光の使者！闇の霊に対して与えられた奇妙で謎めいた名！ルシファア、暁の子！光をもたらすのは彼か... 疑ってはならない。」もう一人はヨーロッパの女性ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー夫人で、彼女は『シークレット・ドクトリン』の中でこう言いました。「我々の惑星の神であり、唯一なる神はサタンだ。サタン（つまりルシファア）は、人類の知的独立のための自己犠牲の不死の象徴たる、宇宙の遠心的エネルギーを代表する。」皆さん、あの時代には、人々は見えないところでサタンを礼拝していました。しかし今は、すっかり公然と行われています。ヨーロッパ全体においてです。1950年代初めに、欧州原子核研究機構が始動しました。それは一般に CERN として知られています。これを目にしたことがありますか。CERN（セルン）というのは実はフランス語の名前で（Conseil Européen pour la Recherche Nucléaire）、欧州原子核研究機構のことです。それは科学者から成るグループで、1989年に CERN はティ

ム・バーナーズ-リーの指揮のもとに、ワールド ワイド ウェブ プロジェクトを始め、史上初のワールド ワイド ウェブページが誕生しました。1993年4月30日に CERN はワールド ワイド ウェブが誰にでも無料で提供されることを発表しました。初めは CERN 内のコミュニケーション用に用いられ始めたのですが、突然、誰でも無料で使用できることになったのでした。私が一つ言えることは、それは闇の中で始まって、闇の中で進み続けているということです。今の時代に、あまりにも暗くて見えないものがあるとすれば、それはインターネットだからです。彼らが何をしたかをお知らせしましょう。人々が神に取って代わろうとしたバベルの塔の時のように、この人たちは、フランスとスイスの国境をまたぎ、90億ドルの費用をかけて地下175メートルの深さに埋められた、円周27キロメートルのトンネル状の構造をしたセルン粒子衝突型加速器 (CERN Collider Complex) に着手したのです。この衝突型加速器は光を送り出し、あることを再現することが期待されているんです。そのあることとは、なんと、ビッグ・バンなんです！彼らは、それを実行する方法を発見したと言っています。私は驚いています。それは彼らが科学者だからです。科学者というのは通常、宗教的なものとは一切関係を持たないようにするものだからです。彼らは中立の立場を守ろうとします。彼らは科学だけにしか目を留めようとしません。この組織は、その本部のある建物の外に、ある一つのことを据えることにしたのですが、そのあるものというのが、よりもよって、破壊の女神シヴァでした。皆さんにもお分かりだと思いますが、彼らは、自分たちのしていることが、確かに破壊をもたらすことのできるものだと言っているのです。実のところ、そのロゴに関しては、ご覧のとおり、それが三つの「6」という数字からできているという推測もあります。ところでその本部は Saint-Genis-Pouilly (サン ジュニ プイイ) という名の町にあるのですが、この名前の Pouilly というのは、ラテン語の“Appolliacum”から派生したもので、ローマ時代にはアポロをまつた神殿があったとされ、そこに住む人たちは、それが黄泉の国への入口であると信じていたとされています。道理で、CERN の活動の大半が地下で行われているわけです。CERN が、その同じ場所に造られているのは興味深いことです。黙示録9章の1節、2節、11節に書かれています。「その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。」「その星が、底知れぬ穴を開いた。」「彼らは、底知れぬところの御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語でアバドンといい、ギリシャ語でアポリュオンという。」彼らは、アバドンにちなんで名づけられた場所に位置しているんです。底知れぬ穴を統轄するものにちなんで名づけられた場所に。しかし、今日 CERN は別のことでもっとよく知られています。それは、科学者たちが神の役割を演じて、何百万年も前に宇宙を誕生させたビッグ・バン直後の状態を再現しようという試みのもとに近く行われる実験のことです。ですから、ヨーロッパの人たちは、自分たちを、ぞっとするような神々のおき、それから底知れぬ穴を管理している御使いの名前のついた地に住み、そして神のような創造をして神のようにふるまおうとしているのです。今年、2016年6月1日には、ゴッタルドベーストンネルの開通式典が催されました。スイスにあるこの全長57キロメートルのこのトンネルは、この地球上の歴史の中で最も長く、また最も費用のかかったトンネルですが、その開通式典は非常に奇妙なもので、画面上のこの人物はあの「ヤギ」の頭をかぶっているんです。言っておきますが、これはバフォメットです。その儀式の最中に何が起こったか

をお話ししましょう。中心となるのは、バフォメットに驚くほど似ているこのヤギ男の演出ですが、オカルトの世界では、バフォメットというのは、しばしばサタンの象徴であったり、サタンが人間に化身したものであったりします。反キリストがそうですね。この儀式の中で、ヤギ男が死にます。ヤギ男は死んで、致命傷から復活します。儀式の最中に、ヤギ男は皆から崇拝されます。そしてこの儀式の中で、ヤギ男は全世界の支配者として冠を授けられます。今年6月1日にスイスで行われた儀式の最中にです。私が何を言おうとしているのか、お分かりだと思います。

ヨーロッパを発展させようとする働きは、近代では1923年にオーストリア人の伯爵によって始められ (Paneuropean Movement)、1950年のフランス外相によるシューマン宣言へと続き、1951年のパリ条約、1957年のローマ条約へと続きました。EU (欧州連合) は、文字通り、ローマで結ばれた条約から始まったのです。新ローマ帝国ですよ。おもしろいことに、彼らは1987年にも単一欧州議定書 (SEA) に署名し、1992年にはマーストリヒト条約、それからアムステルダム条約へと続きましたが、2007年にポルトガルのリスボンで署名された条約では EU の組織構造に新しい職務が作られました。欧州理事会常任議長です。近代のヨーロッパでは初めて、時にかなってヨーロッパ全体を統治する地位が設けられたのです。

ダニエル書7章で、私たちはこれらの獣がやってくるのを見ました。7節と8節のあの夜の幻にあります。

「突然、第四の獣が現れた。それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現れたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。私とその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。」ダニエル書7章7-8

もう存在していなんです。

「よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があった。」

ダニエル書7章7-8

考えてみると、かつて10民族がいた地域から、ご覧のように、3つの民族が引き抜かれ《西ゴート族 (Visigoths) – スペイン、アングロサクソン民族 (Anglo-Saxons) – イギリス、フランク族 (Franks) – フランス、アレマン族 (Alemanni) – ドイツ、ブルグント族 (Burgundians) – スイス、ランゴバルド人 (Lombard) – イタリア、スエビ族 (Suevi) – ポルトガル、ヘルール族 (Heruli) – 根絶、東ゴート族 (Ostrogoths) – 根絶、バンダル族 (Vandals) – 根絶》、この絵に見られるように、目があり、大きなことを語る口を持つあの小さな角が生えてきているのです。

ヨーロッパは今、危機に直面しているのをご存知ですね。来る日も来る日も、移民が押しかけてきています。皆さんに知っておいてもらいたいのですが、それでお金儲けをしている人たちがいるんです。人権団

体は移民を助けることで、ジョージ・ソロスといったような人たちから報酬を得ているんです。ですから、彼らは海に落ちる前から、人権団体によって報酬稼ぎのために、拾い上げられているんです。そういう団体は、お金を得るために彼らの写真を撮って記録をつけているんです。そのため、今は、ヨーロッパに行くのが、これまでになく簡単になっています。ヨーロッパへの移民は、時には一日に6千人を数えることもあります。それらの写真を見たら分かりますが、彼らは色んな場所から来ています。この地図によると、彼らは北アフリカや、シリアや、はるかトルコから来ています。これらの人々には行くべき場所が分かっている、ハンガリーやイタリア、ギリシャやトルコにはとどまらないで、ドイツで止まり、スウェーデンで止まるんです。彼らがどこで保護を求めているか、この地図を見れば、はっきりと分かります。彼らは深緑色の大きな円で示されている場所に行きたがっています。今日のスウェーデンは、900万の人口のうち100万人がイスラム教徒で、ストックホルムでは高校生の半分以上がイスラム教徒です。毎日イスラエルを非難しているスウェーデンに、このことが起こっているんです。ご存知ですか？パチカンには解決策があるんです。パチカンの解決策というのは、次のようなものです。あなたが良い人になりたいなら、ただ、良い人にならなければならないことを理解しさえすればよいのです。どんな信仰でも、それを捨てる必要はありません。良いことを言い、良い人間になり、良いことをする。それだけです。さあ手をつないで、クンバヤを歌いましょう。教会、カトリック教会はこれらの移民たちを受け入れるために扉を開いています。そして彼らは移民たちにこう言うのです。「あなたたちも、いい人になりさえすればいいんです。あなたたちも私たちと同じです。私たちみたいになればいいんです。」現在、ヨーロッパにはリーダーシップ危機があるとされています。かつて人民と政府がこんなにもかけ離れてしまったことはありませんでした。人々はアメリカを追い出し、スウェーデン政府を追い出し、フランス政府を追い出し、ドイツを追い出し... みんなを追い出したがっています。それは、今起こっていることが、人民の意思に沿うものではないからです。それで、パチカンが政府と人民との間に立ち、「心配は無用。私たちは彼らを変えるから。彼らは良い人間になりたがっているし、そうなるから。彼らはイスラム過激派から逃げて来たのだから、私たちが彼らを良い人間になるように訓練しさえすればいいのだ」と言うのです。「良いことをし、良い人になり、良いことを言い、良い気分である。これが新世界宗教です。神の国に入るためにイエスを信じる必要はありません。」ローマ法王がそう言ったのです。「ただ良い行いをしなさい。」そしてこれらの移民たちは一人残らずその道を選ぶでしょう。なぜなら、戻りたくないからです。過激なイスラム教には、戻りたくないからです。もしも状況が良くなるのであれば、戻るかもしれません。しかし今現在は、ヨーロッパで何らかの希望を探しているのです。ヨーロッパは神を追い出しました。ヨーロッパは、バビロンを呼び寄せました。ヨーロッパは、サタン崇拝を発信します。ヨーロッパは、リベラルなライフスタイルを発信します。ヨーロッパは、グローバリズム（世界主義）を推進します。ヨーロッパは、ものすごく反イスラエル主義です。すべての要素がそろっています。その場所には、準備が整っています。誰かが台頭してくるために。その、道徳的にひどい状況の中から、リーダーシップ危機の中から、誰かが立ち上がろうとしています。見ていてください。ロシアがイスラエルを攻撃するでしょう。そうです。トルコが

イスラエルを攻撃するでしょう。そうです。イランがイスラエルを攻撃するでしょう。そうです。それで、彼らは、誰に打ち負かされることになりますか？（神です。）ですから、ロシアはなくなり、イスラム教世界はイスラエルと戦うことをあきらめ、イスラム教はもはや重要ではなくなります。アメリカには関係がありません。アメリカは、エゼキエル書によると、蚊帳の外にいて、このこと全体を批判する以外には何もしていないことになります。もしも、タルシシュの若き獅子が実際にアメリカであるならばです。ヨーロッパだけが、力を増して、中東に平和を持ち込むことのできる勢力なのです。そしてヨーロッパには、あの罪の人を生み出す用意ができています。あの邪悪な者、滅びの子。彼はそこから出ます。私の言うことを信じてください。ユダヤ人は、ヨーロッパの人物を受け入れることには、全く何の問題もありません。しかし、アラブのイスラム世界の誰かを受け入れるというのは、彼らにとっては大問題です。

ヨーロッパに準備ができているなら、世界にも準備ができています。異教徒たちにも準備ができています。問題は、あなたには準備ができているか、ということです。現在の状況に目を向けると、私たちはすっかり失望してしまうかもしれません。しかし、コロサイ人への手紙3章1～2節にはこうあります。

「もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右の座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」コロサイ人への手紙3章1～2節

アーメンですか？

もし、私が世界で今起こっていること、特にヨーロッパの状況ばかりを見ていたら、私は一生うつ状態になってしまうでしょう。でも、私の希望はこの世にはありません。私の希望はこの世界の神々にも、この世を動かしている人々にもありません。私の希望は父なる神の右に座しておられるイエス・キリストにあり、彼は昼も夜も私のためにとりなしてくださっているのです。

「私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」ピリピ人への手紙3章20節

ですから、私たちは私たちの国籍がどこにあるのかを覚えていなくてはなりません。私たちは救い主が来られて、私たちのからだを変えてくださるのを、待ち望んでいなければなりません。見なさい。私たちはみな、一瞬のうちに変えられるのです。終わりのラッパとともに。素晴らしいではありませんか。私たち全員が変えられることになるんです。支度は整っています。今朝がた、私たちは中東に用意が整っているのを見ました。そして今、反キリストのための用意が整っているのを見ました。これらのことを軽く受け止めないでください。恵みの希望を、握りしめておいてください。ですが、先のアン・グラハム・ロツツさんの素晴らしいメッセージの中で語られたように、裁きは神の家から始まります。私たちは自分自身を

探らなければなりません。そして準備をしなければなりません。私たちには用意がなければなりません。なぜなら、まもなく、本当にじきに、私たちは王に会うからです。

祈りましょう。

お父様、この世を見ると私たちはとても陰鬱になります。特に、ヨーロッパで起こっていること、ヨーロッパが受け入れていることを考えるとそうです。それでも、私たちはすべてのことは主の御手の中にあり、あなたが王座に座っておられることを知っています。お父様、私たちに見る目があり、聖霊様が語られることを聞く耳があることを感謝します。そして、あなたが恵みとあわれみによって、私たちにあなたのご計画を明かしてくださっていることを感謝します。お父様、あなたはあなたの子どもたちが暗やみにいるのを望まれないことを感謝します。お父様、あなたが預言を与えてくださったおかげで、私たちには恐れる必要がなく、用意ができることを感謝します。私たちを愛してくださってありがとうございます。あなたは何と愛にあふれるお父様でしょう。そしてあなたは私たちが滅びることをのぞまず、私たちが永遠の命を持つことを望んでおられます。お父様、今、この素晴らしいカンファレンスの締めくくりに際して、私たちが喜びにあふれ、平安のうちに解散できますように。私たちは、私たちの救いを知っており、私たちの体の贖いが近づいていることを知っていますから。私たちは頭を上にあげ、私たちの恵みの希望を待ち望みます。そしてキリストが栄光を帯びてこの地に戻って来られるとき、私たちが共に戻ってきます。あなたがあなたの子どもたちのために備えてくださったものは、なんとすばらしいことでしょうか。目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの。ありがとうございます。私たちは今、天にあるものに目を向け、焦点を当てることを選びます。私たちはあなたに感謝し、あなたを祝福し、あなたを愛し、これらすべてのことを、イスラエルの聖なるお方、王の王、主の主、ユダの獅子、神の子羊、平和の君、インマニエルの御名において、すべての名にまさる名において、人が癒され救われることのできる御名において、唯一の真理であり、唯一の命であり、唯一の道であり、比べるものがない、美しい御名、ヤシュア（イエス）の御名において祈ります。アーメン。

また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけない。時が近づいているからである。」

不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」

黙示録22:10-12